

# 関係詞 *that* と *which* に関しての一考察

—主格用法における相違点を求めて—

堀 内 俊 和

## AN INQUIRY INTO THE DIFFERENCE BETWEEN THE RELATIVES *THAT* & *WHICH*

Toshikazu Horiuchi

Although a number of things have been said about the relatives *that* and *which*, yet there seem to be some questionable points left to be answered. So some investigations and considerations are made of all the specimens of the two relatives IN SUBJECTIVE CASE, from ten books (chiefly American novels) published after 1940. The results are as follows.

Functionally and in psychological effects, *that* is more conjunctive than pronominal and connects the antecedent with the clause introduced by it, more closely than *which*. The content of the clause seems to be mostly ordinary and plain enough.

As *which* is stronger both phonetically and semantically, the clause introduced by it seems to attract much greater attention than *that*-clause. So, when the relative clause deals with what the writer thinks is important or fairly new, *which* is more effective than *that*. Hence more *which*-clauses in scholastic writings.

Statistically, in restrictive use, *that* is usually in higher frequency and more general use than *which*.

### はじめに

先行詞が人間以外の場合の関係詞 *that* と *which* に関しては、(a) *that* には前置詞付きの用法はない、(b) 通常 *that* は制限用法だけである、(c) 制限用法においては *that* が一般的であるが、*which* が好まれる傾向が生じつつある<sup>①</sup>、(d) *that* (または *which*) のほうが他より好まれる場合がある、というようなことがよく言われてきている。しかし、(a) は問題ないとしても、その他に関しては多少の疑問が残るし、*that* と *which* には何か他のもっと本質的な相違があるような気がするので、(b)～(d) の実状を調査しつつ、これら2つの関係詞の相違点を明らかにしてみたいとするのが小論の目的である。

調査用資料テキストは、特に現代(アメリカ)英語に焦点を合わせる意味で、1940年以後のアメリカ小説を中心にして、無作意に選んだつぎの10冊である。

A: Hemingway, E. *The Old Man and the Sea*. (Jonathan Cape) .

B: Johnston, W. *Ben Casey*. (Lancer Books) .

C: McCullers, C. *Reflections in a Golden Eye*.

(Bantam Books) .

D: Michener, J. A. *The Bridges at Toko-ri*. (Bantam Books) .

E: Salinger, J. D. *Franny and Zooey*. (Bantam Books) .

F: Southern, T. & Hoffenberg, M. *Candy*. (Putnam's Sons) .

G: Steinbeck, J. *The Pearl*. (Bantam Books) .

H: Updike, J. *Of the Farm*. (Penguin Books) .

I: Lamb, S. M. *Outline of Stratificational Grammar*. (Georgetown University Press) .

J: Neubardt, S. *Contraception*. (Pocket Books) .

さらに、今回の調査対象は、各著者の書記表現に限るために、会話文・引用文は除外したし、いわゆる接触節が頻発して、*that*・*which*・「省略」の3者が共存する目的格の場合はひとまずおいて、両関係詞の比較が直接的かつ単純に行いうる主格用法に限定した。

### *that* と *which* の相違

1.1. 非制限用法の *which* は、よく言われるように、直

前にコンマ・ダッシュ等の休止符をとって、挿入的に説明したり追加叙述をしていることを明示するのが普通である。

1.1<sub>2</sub>. しかし、直前に休止符はなくても、明らかに非制限的なつぎのような *which* は、決してまればない。

(1) He [the fish] had stayed so close that the old man was afraid he would cut the line with his tail *which* was sharp as a sythe and almost of that size and shape. *A* 47.

(2) Once in the uterus, the device resumes its round shape *which* prevents its falling down through the narrower cervix. *J* 101.

1.1<sub>1</sub>. のように休止符をとるか、このように休止符をとらないかは、著者の好みによる場合も多いであろうが、*which* の前に生じる休止に差をつけようとする場合もあるであろう。いずれにしても、上例においては、*which* の前に休止が生じ、追加叙述をしていることが感じられる。さらに、それぞれの *which* は、接続詞と代名詞を用いて 'for it', 'and it' と書きかえてもよいような感じすらしてくるであろう。

1.2<sub>1</sub>. 制限用法が普通だと言われる *that* にも、直前にコンマをとり、明らかに非制限・挿入説明的な場合があるが、資料全体でつぎの1例が見出されただけで、これはきわめてまれなケースであろう。

(3) . . . the male fish jumped high into the air beside the boat to see where the female was and then went down deep, his lavender wings, *that* were his pectoral fins, spread wide and all his wide lavender stripes showing. *A* 47.

1.2<sub>2</sub>. しかし、直前にコンマ等はないが、先行詞を限定する制限用法というよりはむしろ、先行詞本来の性質を述べたり(例文4)、その状態等を説明する(例文5, 6, 7)、非制限用法の *that* は、それほどめずらしいものではない(2.11. 参照)。だから、現代において *that* はもっぱら制限用法に用いられるのが普通である、と言って、*that* の非制限用法にはあまりふれようとしないのは、この事実<sup>(6)</sup>に目をつむった記述と言わなくてはならないであろう。

(4) When it [pregnancy] is not achieved, there is a menstrual flow *that* clears the stage for another cycle and another attempt; . . . *J* 72.

(5) "How do you feel, hand?" he asked the cramped hand *that* was almost as stiff as rigor mortis. *A* 53.

(6) The night table *that* ordinarily stood alongside the bed had been moved close enough to it . . . *E* 188.

(7) . . . there lay, like a papery golden mat spread before the front door *that* gazed with its single large pane through the grape arbour towards the meadow, a rhomboid of sun . . . *H* 47.

ところで、この *that* は、非制限用法ではあるが、1.1<sub>2</sub>. で述べた *which* とは明らかに異なっていることに注目しなくてはならないであろう。すなわち、*which* のほうは、さきに述べたように、直前に休止が生じ追加叙述をしているような感じになるのに反して、*that* のほうは、Zandvoort が指摘しているように、その導く節を先行詞に密着させ、あたかも先行詞と *that* 節が不可分の一体をなしているような感じを与えるのである。

1.3. さらに、直前にコンマ等の休止符なしで用いられる *that* や *which* の中には、制限用法なのか、非制限用法なのか、判断のつきにくい場合がある<sup>(8)</sup>。

(8a) . . . and her face turned three quarters towards a light *that* all but dissolved the suggestion of a pout on her lips. *H* 19.

(8b) But, sadly, she was dressed in a dark-purple suit *which* clashed atrociously with the green of the jewels. *B* 9.

(9a) Just then the fish gave a sudden lurch *that* pulled the old man down on to the bow and would have pulled him overboard if he had not braced himself and given some line. *A* 53.

(9b) The entire lining constantly secretes a thin mucus *which* normally runs down along the vaginal wall in a gentle cleansing action. *J* 25.

(8)の場合、「ふくれ面をかき消す」光とそうでない光があるわけでもないだろうし、「greenの宝石と合う dark-purpleの」'suit' と合わない'suit' があるわけでもないだろうから、いわゆる制限用法ではない。(9a)の場合には、*that* 節が'sudden lurch'の強さを限定明示しているともとれるが、魚が急にグイと引いたので '*that*' 以下のようになったとも感じられる。また、(9b)においては、*which* 節で述べるような「薄い粘液」とそうでない「薄い粘液」があるともとれるし、「薄い粘液」は1種でつねに '*which*' 以下で述べるようなはたらきをするとも感じられるが、いずれであるかは文脈からも察しがたい。

ここで述べた制限的なのか非制限的なのか判断のしにくい場合においても、1.2<sub>2</sub>. で述べたような、*that*

と *which* の心理的影響の相違は感じられると思う。すなわち、*that* 節は、どちらかという先行詞のほうに密着しようとする傾向があるのに反して、*which* 節は、直前に若干の休止をとり、文のテンポもいくぶんおとして、追叙説明的な感じをより強く与えるように思われるのである。

- 1.41. 以上述べてきたのと同じような相違は、制限節においても感じられるように思われる。同一作品からの *that* と *which* の例を少しあげてみよう。

(10a) . . . then they were inside, and Grindle lit a lamp *that* was sitting on the wide reef-edge of the grotto. *F* 198.

(10b) She did, however, manage to catch hold of a metallic object *which* was on the floor (a brass bedpan) with her free arm and, by dint of crashing it repeatedly and hysterically on the head of her ravisher, she finally succeeded— . . . *F* 64.

(11a) During this struggle between horse and rider, Mrs. Penderton laughed aloud and spoke to Firebird in a voice *that* was vibrant with passion and excitement: *C* 24.

(11b) He asked for the name in a tone of voice *which* suggested that he did not believe they could possibly screw up one between them.

*C* 50.

例文からわかるように、*that* 節は、ただ単に先行詞と密着してそれを限定明示しており、その限定内容も、平明で一般の場合が多く、*たんだん* としている。それに反して、*which* 節は、先行詞と密着するというよりもむしろ、直前になにか休止のようなものが生じ、*that* 節とはちがって、その内容に大きな注意・関心をひきおこさせる *ちから* をもっているように感じられる。すなわち、*which* 節の内容は、重要であるか、新奇である場合が多いのである。

- 1.42. つぎの2つの場合を比較してみよう。

(12) In addition it offers advantages not found in other techniques. It is the only method *that* also offers protection against venereal disease and so serves a double purpose for single people. It is also the only method *which* demonstrates its effectiveness after each use. Other forms of contraception are used with blind faith, but the condom offers visual and tactile proof after each intercourse that the sperm has not entered the vagina. *J* 41.

(13) It [the condom] has three unique advantages. It is the only technique *that* protects both partners from the transmission of syphilis and gonorrhoea as well as pregnancy.

It is the only contraceptive *that* will permit a man with a tendency to premature ejaculation to prolong the act. And it is the only technique *that* puts the entire responsibility on the man. *J* 153.

(12) においては、はじめに *that* 節を用い、つぎに *which* 節を用いているが、後者の場合は、特に関係詞を *which* にかえていくぶんテンポをおとし、その内容に注意を引こうとしているのである。このことは、その後続く文が *which* 節の内容を付加説明しているのを見てもうかがえるであろう。そして (13) においては、'condom' の3つの利点をあげているのであるが、特にどれに重点をおこうというわけではなく、すべて対等に *that* 節を用いて *きりり* と述べているのである。

- 1.43. *which* 節の特性がうまく生かされていると思われる例を、文学作品からあげてみよう。

つぎの一節は、大切なひとり息子の赤子をサソリにかまれてしまった Kino 夫婦が、勇気をふるいおこして医者の家へやってきた場面であるが、ここで、長い間 Kino たちの種族をいじめてきた医者 の種族を限定明示する *which* 節は、そこに注意を集中させようとする点で、おおいに効果をあげていると思われる。

(14) Kino hesitated a moment. This doctor was not of his people. This doctor was of a race *which* for nearly four hundred years had beaten and starved and robbed and despised Kino's race, and frightened it too, so that the indigene came humbly to the door. And as always when he came near to one of this race, Kino felt weak and afraid and angry at the same time. *G* 12.

また、同じ作品からのつぎの *which* 節は、ひじょうに短いものではあるが、暗やみの中で、追手には気づかれずに対決している Kino たちにとって、かれが追手におそいかかる途中で石にでもつまずいてしまえば、かれらの運命はまったく変ってしまうであろう重大な事態を考慮するとき、同様に効果的であると言えるであろう。

(15) Only twenty feet separated him from the enemy now, and he tried to remember the ground between. Was there any stone *which* might trip him in his rush? He kneaded

his legs against cramp and found that his muscles were jerking after their long tension. G 112.

そして、いずれの場合も、*which* の代りに *that* を用いたとしたら、その心理的効果は半減する、といっても過言ではないであろう。

1.44. かくして、新しい内容・重要な内容を正確かつ論理的に展開しようとする学術論文等の場合には、*that* より *which* のほうが多く用いられるのも当然であろう (cf. 2.12.)

1.5. さて、以上述べてきた *that* と *which* の心理的影響の相違は、主としてつぎの2点から生じるものと思われる。すなわち、

(a) 関係詞 *that* も *which* も通常ストレスをとらず弱型で発音されるが、Zandvoort が言っているように、*which* のほうが音声的に (したがって意味的にも) 強い感じを与え、*that* よりも独立性が強くなりその前後に休止をとりやすい。

(b) 弱型の *that* は、人間を先行詞とする関係詞として用いられるのはもちろんのこと、使用頻度のすこぶ

る高い接続詞としても、関係副詞相当語としても用いられ、機能的には *which* ほど明確でない。したがって、問題の *that* は、関係代名詞として機能するというよりはむしろ、接続詞、一種の指標的接着剤、として作用していると言ったほうがよい、

ということである。

1.6. ついでながら、*which* は前置詞付きで用いられるのに、*that* にはその用法がないということも、この *that* と *which* の特性によるものと考えられる。

#### that と which の使用頻度 (総括の場合)

2.11. 資料テキストA~J中の調査対象となる主格用法の全用例を、コンマ等の休止符があり明らかに非制限用法である *which* (a)、その他の *which* (b)、*that* (c) の3つに分類し、(b)、(c) のなかで制限・非制限の判別はむずかしいが、どちらかというとな制限的な感じを与えるものを ( ) でくくって内数で示し、全体の中で *that* のしめる割合をパーセントで示したのが「表1」である。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
<i>which</i> (a)	2	10	4	8	18	23	2	33	35	11
<i>which</i> (b)	11 (9)	16 (8)	13 (2)	26 (9)	1 (1)	16 (5)	9 (6)	7 (2)	81 (4)	49 (12)
<i>that</i> (c)	47 (12)	15 (0)	59 (4)	27 (1)	37 (4)	16 (0)	44 (4)	90 (11)	19 (0)	64 (1)
(c) の %	78.3	36.6	77.6	44.3	66.1	29.1	80.0	69.2	14.1	51.6

表 1

この表を見てもすぐに、*that* のほうが好まれるとか、*which* のほうが好まれる傾向にあるとか、一般論をもちだすことはできない。しかし、ひとつだけ言えることは、*that* のしめる割合が小さい場合は、

(b) と (c) を比べてみると、(a) の多少にはあまり関係なく、両者の比率がほぼ同じか (b) のほうが大きい場合であり、この場合には (c) において非制限的なものがほとんどない、ということである (表中の B, D, F, I, J 参照)。言いかえるならば、*which* が多用される場合にのみ、よく言われるように *that*

はもっぱら制限用法に用いられる、ということ、最近では *which* が好まれる傾向が生じつつあるから *that* も制限用法にだけ用いられる傾向にある、ということになるのであろうか (補注①; 1.22. 参照)。

2.12. ところで、一般に、*that* が普通であるとか、*which* が好まれる傾向があるとか言うときは、制限用法についてのことであるから、*which* (b), *that* (c) のなかの非制限的なもの (「表1」のカッコ内の数) を除外して *that* のしめる割合を調べたのが「表2」である。

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
which	2	8	11	17	0	11	3	5	77	37
that	35	15	55	26	33	16	40	79	19	63
thatの%	94.6	65.2	83.8	60.5	100	59.3	93.0	94.0	19.8	63.0

表 2

テキストI においては依然として *which* のほうが圧倒的に多いけれども、その他のテキストにおいては多少なりとも *that* のほうが多くなっている。I に *which* が多いことは、それが精緻さを必要とする学術論文であって、1.44. で述べたように容易に納得できる、いわば特殊なケースと言ってよいであろうから、総括的に言うならば、*that* のほうが *which* よりも制限用法においては一般的である、ということは、現代においてもなお当を得たことのように思われる。

「*that* の好まれる場合」

2.21. 古来 *that* のほうが好まれると言われてきた場合を、(a) 先行詞に最上級の形容詞、*the only, the first, the same* がつく場合、(b) 同様に *every, all, any* がつく場合、(c) 先行詞が *any, some, no, every* の複合形か *all* の場合、の3つに分類しその数を調べてみたところ、いずれの場合も *that* のほうが多くなっていた (表3)。

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計 (%)
(a)	which			1			1				2	4(25)
	that				1	1			1		9	12(75)
(b)	which							1		1	1	3(27.3)
	that	2				2	2	2				8(72.7)
(c)	which			1	1		1					3(14.3)
	that	1	4	3	1	2	3	2	1		1	18(85.7)

表 3

2.22. ここで注目すべきことは、例文 (12) (*the only* ... の場合) および (15) (*any* ... の場合) でふれたように、*which* を用いたときはそれなりの理由が見出されることが多い、すなわち、1. で述べた関係詞 *which* の特性が生かされていることが多い、ということである。

同一作品から、同じような状況下で、*that* と *which* の対立が見出される例をもう少しあげてみよう。

(16a) What made this especially infuriating

was that all this time the carrier remained in stabilized position and all the jets could have been landed. Then he saw something that frose him. The towering black crane called Tilly was being moved into position alongside the wrecked Banshee, right where the missing nylon barricade should have been. Then a quiet, reassuring voice spoke to him, offering a choice. D 80.

(16b) Instead, he checked to be sure the *Savo's* deck was ready and in doing so he saw something *which* reassured him. Far aft, standing upon a tiny platform that jutted out over the side of the carrier, stood a hulking giant, muffled in fur and holding two landing-signal paddles in his huge hands. It was Beer Barrel, and if any man could bring jets surely and swiftly, it was Beer Barrel. *D* 9.

(17a) There was something in his odd tone *that* caused Candy to turn and look at him now for the first time. He wasn't a boy at all she saw then, but a man . . . . *F* 181.

(17b) There was something in Pete Uspy's manner *which* reminded Candy of Professor Mephesto, despite the former's atrocious accent, and she felt a confidence and rapport warming inside her. *F* 166.

たまたま *something* の例ばかりになってしまったが、例文 (a) の *that* 節よりも (b) の *which* 節のほうが、テンポもゆるやかで明らかに強い注意・関心を引こうとしていることが、あとに続く内容からうかがえるであろう。というのは、Beer Barrel のジェット機を航空母艦に回収する<sup>16</sup>うでは作中人物のよく知る

ところであり、Professor Mephesto は Candy のあこがれのまどであって、どちらも作品中ではかなり重要な意味をもつ人物であり、その人物に関係したことがらを述べる関係詞節だからである。

#### 「that がさけられる場合」

2.30. つぎに、*that* よりも *which* のほうが好まれるというつぎの場合を検討してみよう。

(a) *that* を先行詞とする場合。

(b) 先行詞に *that* (または *those*) がついている場合。

(c) 先行詞と関係詞の間に挿入の説明がはいったり、2つ以上の関係詞節が並列的・同格的にならないときのアとのほうの関係詞のように、先行詞とのへだたりがかなりある場合(補注③の例文参照)。

(d) 関係詞の直後に副詞節(句)がコンマ等で挿入されて、関係詞の直後に休止が生じている場合。

2.31. (a)に関しては、テキストIに12例見出されただけであるが、そこではすべて *which* が用いられていた。これは口調のうえからも当然のことであろう。

2.32. そこで、(b)、(c)、(d)における2つの関係詞の使用状況を調べてみたのが「表4」である。

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	計 (%)
(b)	<i>which</i>				2					5		7(63.6)
	<i>that</i>				2				2			4(36.4)
(c)	<i>which</i>		1							4		5(26.7)
	<i>that</i>		2	1		3			6		1	13(73.3)
(d)	<i>which</i>		1	1				1		2	1	6(31.6)
	<i>that</i>			2		2			6	1	2	13(68.4)

表 4

(b)においては、*which* のほうがいくぶん多くなっているが、(c)、(d)においては、特に *that* がさけられているとは感じられない。さらに、2.12. でふれたように、テキストIにおいて *which* が多用されるのはいわば当然な特殊なケースであるから、それを除外して (b)、(c)、(d) における *that* の割合を調

べてみると、それぞれ 66.7%、92.9%、75%となった。

これは、さきに述べた(2.12.) 総括的な場合の *that* の使用頻度とほぼ同じ傾向を示している、と言ってよいであろう。したがって、(b)、(c)、(d) に関しては、*that* が用いられるか、*which* が用いら

れるかは、やはり、1. で述べた両関係詞の特性によるものである、と言ったほうがむしろ妥当であるように思われる。

### おわりに

以上でささやかな調査報告を終るが、人間以外の先行詞をとる関係詞 *that* と *which* の主格用法に関するかぎり、およそつぎのようなことが言えるであろう。

*that* は、代名詞というよりもむしろ接続詞、一種の指標的接着剤のようなはたらきをして、先行詞と関係詞節を密接にむすびつけ先行詞を明確化するが、いわゆる制限用法だけではない。また *that* 節の内容は、どちらかという一般的なで平明な場合が多い。

*which* は、*that* にくらべ独立性が強り明らかに代名詞的で、その関係詞節はいくぶんテンポもおそくなり、その内容により多くの注意・関心をひきおこさせる<sup>ち</sup>からをもっている。したがって、重要なこと新しいことを論理的に展開しようとする学術論文などに多用される傾向がある。

統計的にいうならば、制限用法においては、*which* よりも *that* のほうが一般的で使用頻度も高い。

小論で述べたことは目的格用法においてもあてはまるように思われるが、この場合の検討は、会話表現における調査と同様、今後にまきたい。

### 補注

① *who* と同様 *which* も、特に writing においては、*that* よりも好まれる傾向にあるという文法家もある(例. Jespersen: *M. E. G.* III. 8. 11, Curme: *Syntax* 23. II. 6.) が、その傾向はあまり顕著ではないようである(cf. 英文法シリーズ(研究社)「関係詞」P. 26の脚注)。また、*that* のほうが普通だと言う文法家もいる(例. Krusinga: *Handbook Part II.* 2271, Zandvoort: *Handbook* 464)。さらに、*The American Heritage Dictionary of the English Language* の 'that' の項の語法ノートでは、多くのインフォーマントの意見として、*that* のほうが好ましいと言及している。

② 無作意といっても、手もとにあるもの、入手しやすいもの、あまり長すぎないもの、という限定はあった。

③ しかし、逆に、先行詞と関係詞の間に挿入句(節)がはいったり、先行詞を同格的な関係詞節で修飾したりして、直前にコンマはあっても、非制限用法ではないつぎのような *which* もある。

There was a serenity about the day, particularly here in this quiet residential section of the city, *which* seemed to arbitrarily reject even the possibility of tragedy. B 5.

Also, there may be distinguished from each other . . . the type which exists within a single tactic pattern; i. e., *which* is determined by the tactics itself rather than by the upper stratum. I 27.

同様に、つぎのような直前にコンマ等のある制限用法の *that* も少なくない。

It was exactly the kind of pause—just a trifle rich with seniority of years—that had often tried the patience of both Franny and the virtuoso at the other end of the phone when they were small children. E 189.

Now, too, she began to pray for some miracle that would give George the compassion she knew he did not possess, *that* would give him the strength to forgive her and return to her.

B 59.

④ 例文中〔 〕の挿入および関係詞のイタリック体は筆者のものであり、最後の文字と数字はテキストとページを示す。以下同じ。

⑤ cf. 英文法シリーズ「関係詞」II. 13. (2)。

⑥ P. Roberts: *English Syntax* 1998. では、*that* は非制限用法には用いられない、と言っているが、これこそ極論であろう。

⑦ R. W. Zandvoort: *A Handbook of English Grammar* 620. また、*that* 節と接触節との近似性は、Jespersen 他多くの文法家の指摘するところである。

⑧ cf. Zandvoort: *Ibid.* 619, 620; *The American Heritage Dictionary. Loc. cit.*

⑨ cf. H. Poutsma: *A Grammar of Late Modern English* XXXIX. 17. V. ここでかれは、*that* 節は 'well-defined' な場合に用いられ、'minor importance' のことが多い、と言って、先行詞に最上級の形容詞がつくときなどもこの例だとしており、こんなわけで、*which* のほうが *that* よりも好まれる傾向にある、と言及している(cf. 補注④)。

⑩ 著者が意識的に *which* を用いたかどうかはわからないが、とにかく、本文に述べたような感じは感じとれると思う。

⑪ *Op. cit.* 464. *that* の弱母音性については Sweet も指摘している(*Syntax* 2128.)。

⑫ cf. O. Jespersen: *Essentials of English Gra-*

*mmar* 34.4<sub>1</sub>, 34.4<sub>6</sub>.; Zandvoort: *op. cit.* 463.

⑬ cf. Poutsma: *op. cit.* XXXIX.17. IV; 英文法シリーズ「関係詞」II.13. (7). これらによると, *that* が制限用法にだけ用いられるのが普通になったのは, ごく最近(18世紀ごろ)のことだと言うことである.

⑭ A. A. Hill: *Introduction to Linguistic Structure* のはじめの30ページにおける主格制限用法の *which* と *that* の割合を調べたところ, その差はもっと極端で70 (92.9%) : 5 (7.1%) であり, *that* 節は論理の

展開ではなくて, ごくありふれたことを述べるときにだけ用いられていた.

⑮ ちなみに, アメリカの中学校教科書 *Junior English in Action Book 3* では, 主格制限用法の *that* と *which* の比率は120 (90.2%) : 13 (9.8%) となっていた. (引用文は除いてある).

⑯ cf. 英文法シリーズ「関係詞」II. 22.

⑰ *Ibid.* II.22. (1).